



—地域保全・地域活性化部門—

京都府知事賞

伊根町 農村広域協定 運営委員会

伊根町



1歩も2歩も“先”に行く 農地保全と地域づくりの“先進地”

令和元年度に6組織で広域化がスタートしました。その後は参画組織も増え、今では全町をカバーする規模に拡大しています。広域化をきっかけに活動が広く周知され、集落間や農家・非農家の垣根を越え、一体となった活動が行われる様になり、ラジコン草刈機などを積極的に活用するなど、先を見据えた農地保全活動、地域づくりが行われています。



広域化で非農家の活動認知向上

広域組織設立時には、非農家も含めて説明会を行いました。この結果、制度の認知が深まり、非農家の活動参加も増えています。



先を見据えた総合管理体制の構築

ドローンなどの省力化機械の積極活用にとどまらず、オペレーターの育成や作業賃金の安定化にも挑戦しています。



小学校と連携した田植え体験

田植え、稻刈り、そして親子会での餅つき、自分で植えみんなで食べるお米は格別です。



－地域保全・地域活性化部門－
京都府農業協同組合
中央会長賞

萩原集落協定

福知山市



“有志グループ”を結成し 一人一人の“負担軽減”へ

集落の農地を荒廃させたくないという強い思いから、有志による新たな農作業グループを結成し、「そば」を栽培して遊休農地の有効活用などを始めました。結成1年目から、グループで活動すれば個人に掛かる負担を軽減できることを実感し、この取組の効果を他地域へも普及できればと考えています。



農地の荒廃防止

集落の農地を守るため、有志グループで積極的に保全活動を行っています。



一面に広がる美しい「そばの花」

秋には「そば」を栽培し、今後は春の「れんげ」栽培を計画しています。その美しい景観は、地域住民にも喜ばれています。



集落全体で共同活動

中山間直接支払の協定共同で獣害柵を設置し、集落全体で鳥獣害防止対策を行っています。



—地域保全・地域活性化部門—

京都府
農業会議会長賞

越畠農事組合 集落協定

京都市



“地域資源”を上手に魅せる！“棚田”と“そば”で地域活性化に成功！

「棚田こそが地域の資源」と捉え、農地の区画を変えることなく農道と水路のみを整備するなど、棚田の景観を守り続け、令和3年度には「つなぐ棚田遺産」に認定されました。地域の特産品そばを使った料理を味わえ、地域のランドマーク的な役割も担う「越畠フレンドパークまつばら」を中心に、特産品ホオズキの栽培や季節に合わせた各種イベントの開催など、地域資源を積極的に活用し、地域活性化に取り組んでいます。



地域の特産品「ホオズキ」

棚田を「ホオズキ」で彩り、耕作放棄を防いでいます。特産品として、都市部にも出荷しています。



越畠フレンドパークまつばら

地元産そばを使った十割蕎麦は、大人気で、年間約2万人が訪れます。



多様な地域イベントを開催

「ハロウィン祭」や「愛宕竹灯籠」など、美しい棚田を会場にしながら様々な地域イベントを開催しています。



－地域保全・地域活性化部門－
京都府土地改良事業
団体連合会長賞

中村 地域活動組織

南丹市



“地域誌作成”をきっかけに再集結！“ソーシャルキャピタル”向上に

高齢化により集落の寄合いが減るなど、コミュニティ機能の低下を危惧したことから、地域誌の作成を決意しました。地域の文化や歴史などをまとめるため、月に1回の話し合いの場を設けることで、地域の課題や今後のあり方について共通認識を持ち、地域活動に取り組むことができるようになりました。集落の結束力が高まりました。



「わが故郷 中村の記録」の作成

住民みんなで何度も話し合いを重ね、地域の文化・歴史・行事などをまとめた“地域誌”を作成しました。



和気あいあいのムラづくり

地域誌づくりをきっかけに、これからムラのあり方について知恵を出し合い、より良いムラづくりに励んでいます。



大事なため池の維持管理

集落内には、複数集落が受益となる大きなため池があります。本地区が主となり、取水操作や維持管理を行い、長い間守り続けています。



一環境保全型農業部門一

京都府農地・水・環境保全
向上対策協議会長賞

薰茶会

京都市



惜しみない“努力”が生んだ“有機JAS認定”

土づくりに、くん炭や菜種かすを使用するなど、化学合成の肥料や農薬を使用しない有機栽培に取り組んでいます。また、小学校で「お茶の体験学習」を行い、消費者へのお茶栽培や有機農業の理解醸成に努めています。



お茶の体験学習で食育を

茶摘み、碾茶工場の見学、ホットプレート製茶、
茶香服などお茶の体験を通して、お茶の栽培から
製品になるまでを知る機会を作っています。

こだわりの栽培方法

くん炭、菜種かす、魚粉などの有機資材を使用し、株元だけに溝を切って施用する昔ながらの方法を守っています。